

日本イギリス哲学会関東部会 第98回研究例会

日時 2016年12月10日(土) 14:00~17:15

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟 地下1階第1会議室

プログラム

14:00~15:30

『リヴァイアサン』における超自然的現象の解明の試みについて

岡田 拓也 (東京大学大学院)

15:45~17:15

ミル「結婚論」の成立過程  
——文明社会の担い手としての女性の発見——

山尾 忠弘 (慶應義塾大学大学院)

関東部会担当 伊藤誠一郎 (seiichiro@mtj.biglobe.ne.jp)

矢嶋直規 (yajima@icu.ac.jp)

(◎を@にお直してください)

日本イギリス哲学会関東部会第 98 回例会（2016 年 12 月 10 日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

『リヴァイアサン』における超自然的現象の解明の試みについて

岡田 拓也（東京大学大学院）

本報告は、トマス・ホッブズの主著『リヴァイアサン』において、『市民論』から大きく拡充された宗教論と聖書解釈を扱う。その中でも、これまでホッブズ研究で等閑視されていた以下の点に着目する。すなわちホッブズが『リヴァイアサン』において、『市民論』においては超自然的現象として哲学の領域外に置かれていた事象に分析のメスを入れ脱神秘化するようになったことである。そしてこれがホッブズ哲学のいかなる理論的發展のもとに可能になったのかを明らかにする。以下では 2 章に分けて超自然的な啓示と来世の二つを論じる。

第 1 章では神から直接受ける超自然的な啓示を扱う。ホッブズは『市民論』16 章 4 節で夢や幻影を通した啓示をもって直ちにこれを超自然的なものと断定した。しかし『リヴァイアサン』では 32 章と 36 章で超自然的啓示についてより精密な分析を行うようになる。まず 32 章では、啓示の媒介として称される夢や幻影などは完全に自然的な事象としても理解できると指摘する。36 章では聖書解釈を通し、真の預言者の場合でさえ、その啓示の媒介は全て想像に還元でき、その限りでは自然的現象であると指摘する。こうしてホッブズは超自然的啓示における超自然的要素を極小化した。

第 2 章ではホッブズの天国・地獄論を扱う。ホッブズは、人間の死後の状態は自然的理性には未知だという見解を変えることはなかったが、『リヴァイアサン』では聖書解釈の中でこれを論じるようになった。この背景には、『リヴァイアサン』でホッブズが聖書の権威の基礎—聖書が神の言葉とされることの理由—について考察を深め、これを究極的には個々人の自然的理性に見出したことがある。そのため、『市民論』では人間の死後の状態は、自然的理性によって認識される事象と対比される、神の言葉によって初めて認識される超自然的な事象に分類されていたのに対し、『リヴァイアサン』ではこの 2 項対立が崩れたのである。

## 【報告要旨】

### ミル「結婚論」の成立過程 ——文明社会の担い手としての女性の発見——

山尾 忠弘（慶應義塾大学大学院）

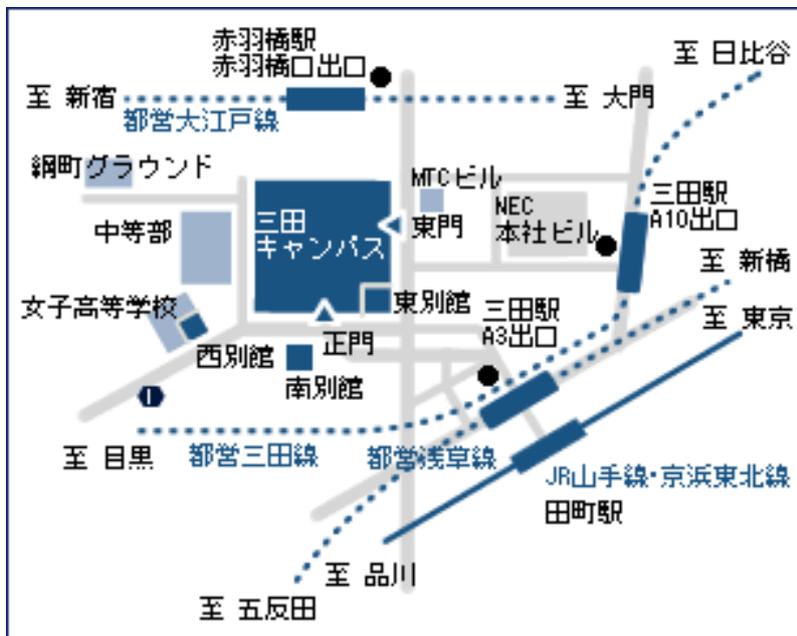
ミル女性論の研究は国際的な活況を呈しているが、若きミルの女性論について、研究者の関心は決して高いとは言えない。本報告では、ミルが1832-33年の間に執筆し、生前は出版されることのなかった「結婚論」というテキストに着目することによって、『女性の隷従』が執筆される以前に構想されたミル女性論を思想史的に解明することをこころみる。

その際に重視されるのは、ミルが「結婚論」の中で「長い間、離婚できないことが女性の社会的地位を向上させるために強力な役割を果たしてきた」と述べていることである。これは離婚の自由を前提とする現代の視点から整合的に解釈することは難しい箇所であるが、本報告では「結婚論」が執筆された思想史的コンテクストを参照することによって、このミルの議論に整合的な解釈を与える。

ミルに先立つ一群の思想家の間で、どの形態の婚姻制度が文明社会に適合的かという問題が一つのコンテクストを形成していた。本報告では、ミルがその問題設定を特にジョン・ミラーの著作から学んだことを明らかにし、彼が離婚の自由を擁護していること、思想史的意義を明らかにする。彼は婚姻の非解消性が女性を自由にしたのだという歴史的逆接に半面の真理を認めた上で、彼の生きた19世紀イングランドにおいて「その段階はすでに終わった」と述べるのである。

18世紀文明社会において、女性は既に「社交の国の主権者」（ヒューム）男性の「友人そして伴侶」（ミラー）という概念のもと、文明社会の担い手として捉えられていた。しかし、ミルの議論に従えば、彼女らは解消できない婚姻という鎖に縛られた、「個人」とはいえない存在であった。ミルによって初めて、人類の半数たる女性は男性の存在に依存しない「個人」として、文明社会の真の担い手として捉えられたのである。

【会場案内】



108-8345 東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車、徒歩 8 分

都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅下車、徒歩 7 分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋下車、徒歩 8 分



研究室棟は⑩の建物です